近世小保・榎津における町並みの成立と展開

FORMATION AND DEVELOPMENT OF THE KOBO AND ENOKIDU URBAN SPACE IN THE EARLY MODERN TIMES PERIOD

安 高 尚 毅*

Naoki ATAKA

This study takes up Kobo and Enokidu in Okawa-shi, Fukuoka. These cities are good examples that understand a city space change from the medieval times to early modern times. A city restored map is created with the land-register map of Meiji. And that city is restored retroactively. Formation and deployment of the city of Kobo and Enokidu are clarified by this change process, and an urban form, the name of a place and the formation age of temples and shrines.

Keywords : Rural Districts Town, Early Modern, Restoration

在方町, 近世, 復原

序

これまで近世在方町に関する研究は、様々な地域の研究がある^{注1)}。近年、これらの研究により、当時の都市空間の実像が明らかになってきた。だが、在方町の中世から近世にかけての変容を明らかにしているものは史料制約もあり、研究蓄積は少ない。近年、在方町は、宮本雅明の論考^{注2)}により、近代社会を拓いた在方町として位置付けがなされている。また、中世から近世への都市空間の変容も管理交易から市場交易の展開をもとに宮本雅明により解明が進んでいる。本稿の小保・榎津も、その論考の中で取り上げられているが^{注3)}、その詳細な分析は報告されていない。

よって、本稿は中近世移行期の在方町の空間変容の推定できる福岡県大川市小保・榎津を事例として取り上げ、その成立と展開を明らかにし、近世在方町の空間構造の特質について明らかとするとともに近世中期の都市復原図を基として中世の古文書・寺社起源・都市形態を駆使しつつ、中世に遡った復原考察を行い、都市の成立過程の仮説を提示したい。

筑後川河口に位置する大川市は、花宗川に沿った小保・榎津と筑後川に沿った住吉・若津の四つの伝統的町並みから成る。藩政時代において、若津と榎津は久留米藩に属し、住吉と小保は柳川藩に属し、それぞれ城下町久留米と城下町柳川の外港として機能した。小保と榎津は中世に成立起源が遡ると見られ、若津と住吉は近世中期に新たに町建てされた港町であり、これら多様な性格を備える四つ

の港町は都市史上注目すべき存在で、これらを比較することにより多くの知見が得られると考えられる。

1. 小保・榎津の町並みの基本構造

1-1. 地籍図による明治期都市復原図の作成

屋敷割の復原図を作成する目的はそこから形態的な特徴を読み取り、都市の形成過程を推察するためである。小保・榎津の復原図を作成するにあたって、基となる史料は、明治20年代の「明治の地籍図」^{注4)}、明治11年(1878)の「筑後国三潯郡榎津町土木取調図」(図1)^{注5)}、明治11年以降明治21年以内(1878～1888)の「筑後国三潯郡榎津町之図」(図2)^{注6)}、明治11年(1878)の「筑後国三潯郡小保町土木取調図」(図3)^{注7)}である。小保・榎津の町並みが展開していた場所は図1、図2、図3より判明する。榎津の小字には「柳町」「藪町」「出来町」「向町」「北浜町」「長町」「城町」「浦町」「船倉」「横町」「庄分町」「本町」「水入町」「津村町」「津村口(一部)」があり、小保の小字には、「上町市場浦」「中船津」「新町浦」があることが知られる。これらの情報を基に、明治の地割復原図を作成することができる。復原図は明治期の地籍図を2500分の1の都市計画図に照合して作成した(図4)。また、復原図を作成するにあたって、榎津の柳町と津村口は、町が連続していないことより除いた。以下、これを基本資料とし、空間に即した小保・榎津の歴史を考察していく。

* 島根大学大学院総合理工学研究科 助教・博士(芸術工学)

Assistant Prof., Interdisciplinary Graduate School of Science & Engineering, Shimane University, Dr. Des.

図1 筑後国三潯郡榎津町土木取調絵図（明治11年）（部分）

図2 筑後国三潯郡榎津町之図（明治11年以降明治21年以内）（部分）

図3 筑後国三潯郡小保町土木取調図（明治11年）（部分）

図4 小保・榎津明治期都市復原図

1-2. 町並みの空間構成

明治期都市復原図の作成過程において、現在の都市計画図と明治期の地籍図は部分的な道路の変化を除けば、一応の合致をみることができ、明治の地籍図が信用のおける資料であると共に、現在の小保・榎津の町並みが少なくとも町割・地割に関して幕末ないし明治初年の様相をかなりよく残していることが確認できた。この地籍図には近世期に形成された町並みの到達点が描かれていると考えることが出来よう。これに依拠しつつ小保・榎津の町並みの空間構成を眺める。

伝統的町並みは東方の柳川に向かう街道に繋がる道筋と、北方の久留米に向かう街道に繋がる道筋を主軸として広がる。両者は札の

辻が結節点となり、そこから花宗川に向かって小保の上町市場・中の船津（後に船津町と仲町）、裏手に新町、北東側に並行して、榎津の本町・庄分町、札の辻から柳川方面には榎津の水入町・津村町、久留米方面には榎津の長町・出来町・藪町が連なり、その裏手に

榎津の城町・浦町・横町が広がり、花宗川から入り込む江湖を挟んで向町が広がる。町筋の背割りには水路が通される。これら水路によって小保と榎津、さらに諸町が画され、河川と江湖によって周辺地域から町並みは画される。久留米側では藪町と出来町および出来町と向町、柳川側では津村町と水入町の境に矩折れが設けられる。地割は間口が狭く奥行き長い短冊状の地割が多くを占める。

1-3. 住吉・若津の都市復原図の作成とその特徴

次に、中世に成立起源が遡ると見られる小保・榎津と比較するため、下流に近世中期に新たに町建てされた港町若津と住吉の町並みの特徴を把握しておきたい。住吉・若津の町並みを復原考察するにあたって、基となる絵図及び資料は、明治20年代の「明

図5 筑後川絵図（文政2年、1819）

治の地籍図」^{注7)}、明治11年（1878）の「筑後国三潯郡小保町図」（図3）、文政2年（1819）の「筑後川絵図」（図5）^{注8)}、年代不詳の「住吉宮旧記写」^{注9)}、『大川市誌』²⁾である。住吉は「住吉宮旧記写」により町建て時の様子が、若津は「筑後川絵図」により街路網と町並みの展開していた場所、『大川市誌』により、町並みが展開していた小字が「北一の割」「北二の割」「南一の割」「南二の割」「三の割」「四の割」であることがわかる。これにより住吉・若津の都市復原図を作成することが出来る。復原図は明治期の地籍図を現状2500分の1の都市計画図に照合して作成した（図6）。

安永4年（1775）に計画的町建てのされた住吉は、町全体は長方形の形態をしており、地尻が直線的な水路で決定され、「住吉宮旧記写」の記載通り計画的な町割である。街路は町を十字に走り、間口が面する南北方向の街路は長方形の町の中心に通され、東西方向の街路も町の中心に通される。この街路に面して宅地が整然と並び両側町を形成する。この街路の長さ及び地割の奥行きを子細に眺めると、南北方向の街路の北側が110m、南側も110m、地割の奥行きは西側が50m、東側が54mと左右対称の形態を示し、間口の広さも約4間とほぼ均質と言え、計画的な町割であることが数値からも読み取れる。

宝暦元年（1751）に開港される若津は、町全体は長方形の形態をしており、地尻は水路で決定されている。整然とした屋敷割で直線的な街路が縦横に通され、両側町を形成し、計画的な様相を呈する。古老の話によると「若津の町は大体間口四間、奥行き二十間に区画され、街路の幅が広いのは（5.5メートル）、昔、船の太網を道路で巻いていたからです。」とある^{注10)}。これを念頭において地割の奥行きを見ていくとほとんどが23間でこの話と合致する。

以上、住吉・若津の町割及び地割は、間口が均質で、地尻は直線

的な水路で決定される形態と言え、近世に計画的に町建てされた町並みの典型的例として捉えられる。住吉の地割の計画寸法は間口4間・奥行き27間、若津の地割の計画寸法は間口4間・奥行き23間で、間口は共通するものの奥行きを4間ほど違える。

1-4. 小保・榎津の町並みの形態的特徴

小保・榎津の街路形態は、緩やかに曲がっているものと直線的なものに大別される。緩やかに曲がっているものは小保の上町市場・中の船津・新町、榎津の本町・庄分町・浦町・船倉・長町、直線的なものは榎津の水入町・津村町・城町・横町・向町・出来町・藪町である。

地割は、間口・奥行きとも不均質な地割を呈する町と、間口・奥行ともに均質な町の二つに大別できる。前者に当たるのは小保の上町市場・中の船津、榎津の本町・庄分町・水入町で、後者に当たるのは小保の新町、榎津の津村町・長町・浦町・城町・出来町・横町・向町・藪町である。両者ともに宅地の奥行が9～30間と浅い点も目を引く。

街路と地割の配置関係は、ほとんどの町が両側町である。例外的に小保の上町市場の一部、中の船津の一部は片側町となる。また、榎津の向町は明治11年の「筑後国三潯郡榎津町絵図」（図1）から現在のような2本の両側町を形成せず、水路が埋め立てられていないため、水路を隔て、北側・南側に別れ、2本の片側町として成立していたことが知られる。榎津の北浜町は線形の空間を形成せず、敷地が短冊状ではない。

地尻は、水路によって決定されるか、お互いの地尻が錯綜しながら接するかであるが、どちらの場合も形態は直線的なものとうでないものがある。直線的でないものは、小保の上町市場・中の船津・新町、榎津の本町・長町・庄分町で、直線的なものは、榎津の津村町・藪町・出来町・横町・浦町・北浜町で、片側が直線的なものは榎津の水入町・城町・向町である。

以上、小保・榎津の町並みは地割が不均質で街路も直線的でない場所、地割が均質で街路が直線的である場所など混在した町並みの様相を呈し、不統一な空間を形成していたことが把握されよう。

2. 近世中期小保・榎津の町並み復原

2-1. 小保・榎津の近世中期都市復原図の作成

近世中期における榎津の町並みを窺い知れる史料として、「米府記事略之巻5」^{注11) 3)}、「久留米領郡中品々寄」^{注12) 4)}、『石原家記』⁵⁾、「啓忘録抜粹」^{注13) 6)}がある。

「米府紀事略之巻5」（正保3年、1647）には「家数四百十二軒」とあり、「久留米領郡中品々寄」（元禄8年、1695）には「長五丁

図6 住吉・若津明治期都市復原図

三十三間榎津町」(333 間、633m)とあり、『石原家記』(宝永3年、1707)には「一榎津町竈数四百六十式間、但丁数十六町三十六間、人数式千四百四十一人、馬数二十五疋。一同町船数式百廿石但百十九艘二十端より式十槽船迄、往来御札申受候。八十一艘ハ舳札、八艘ハ貝取船、式艘ハ渡船。」(996 間 1.9km)とあり、「啓忘録抜粋」(宝永7年以前、1710)には「四百拾八軒但丁数拾三町五拾間榎津町」(830 間 1.6km)とある。

この中で、「啓忘録抜粋」(宝永7年以前)は家数418、町長さ13町50間、『石原家記』(宝永3年)は竈数462、町長さ16町36間と似た値を示す。さらに、「米府紀事略之巻5」(正保3年)は家数412軒とあり、「啓忘録抜粋」『石原家記』の値と近い。よって、これら3つの史料は信が置けると考えられる。また、「啓忘録抜粋」は、内容中に見られる最も新しい年紀が宝永7年で、宝永7年以降に刊行されたものとされるが、多くの記述内容で宝永7年以前の年紀が窺え、この榎津の記述に年紀は記載されない。よって、いつの時期を表しているかについては疑問が残ろう。『石原家記』『米府紀事略之巻5』と照合すると宝永7年以前の状態を記している可能性は高い。また、「久留米領郡中品々寄」(元禄8年)は他の史料と大きく異なっており、記述内容に疑いがもたれる。

以上より、「米府紀事略之巻5」と『石原家記』が年紀が明らかであり信用がおよよう。ことに年紀が確定的で家数と町長さの両方がわかる『石原家記』の記述が重要といえよう。

以上より、小保・榎津明治期都市復原図の榎津の町長さは24町28間で、宝永3年から明治にかけて472間伸びたことになる。この部分はどの場所に当たるのであろうか。

住吉・若津の都市復原図の分析より近世期の計画的に町建てのされた町は街路が直線的で地尻も直線的な水路により決定され間口が均質である形態を示すことがわかった。472間の場所は近世後期に建設されたと考えられるから、地割・町割がこのような形態になっている場所がそれに当たると予想されよう。

図7 三瀬郡蒲池と絵図(正保2年)

図10 小保・榎津近世中期復原図

図8 小保町絵図(天明6年)

図9 小保町絵図(年代不詳)

町の拡大が計画的にされたとすれば字ごとに拡大したと考えるのが一般的であろう。

住吉・若津で見られるような計画的な要素を持っている近世期の町建ての形態、いわゆる間口が均質で直線的なものは、小字でいうと出来町、津村町、浦町、横町、藪町、向町北側である。これらは住吉・若津の形態に酷似しているということで、近世中期から後期にかけて計画的に町建てされた可能性が高いと言えよう。他のものは住吉・若津の形態に類似しないことより、中世起源の可能性があると言えようか。

榎津を通る肥後街道の入口である津村町、藪町は、町の最も外側にあることから、町がある時期に拡大したとすれば、津村町、藪町を拡大したと考えるのが自然であろう。

寺社起源も考慮しておく必要がある。近世期に寺社起源が求められるのは北浜町の水天宮(1708)、津村町の多福寺(1628)である。次にこれらのことを射程に置き、町の長さを測っていく。

町の長さは、水入町が193間、本町が98間、庄分町が140間、長町が124間、城町が124間、船倉が61間、横町が34間、浦町が111間、出来町が94間、藪町が89間、津村町が121間、向町が115間、北浜町が193間である(総町数は24町28間)。街道の入口にあた

り町の最も外側に位置し、間口が均質で直線的な地尻を有する津村町（121 間）・蕨町（89 間）と、町の周縁であり藩政期屋敷地で 1708 年に成立した水天宮の存在する北浜町（193 間）、次に外側にあり数字のつじつまが合い間口が均質で直線的な地尻を有する向町の北側（69 間）を除くと、ちょうど 16 町 36 間となり『石原家記』と合致する。また、津村町・蕨町・向町の北側は地割の計画寸法が間口 4.7 間・奥行き 17 間を示し、若津の計画寸法とは異なるものの^{注14)} 3 者は共通する。この寸法は他の場所とは共通性を見出せないことも傍証となろう。よって、明治の復原図を下敷きに榎津の近世中期都市復原図がつくられる。

小保は「三瀧郡蒲池与絵図」（正保 2 年、1645）（図 7）^{注15)} に既に明治の復原図と同じ範囲に町並みが描かれているため、町の拡大はなかったと考えられる。また、「小保町絵図」（天明 6 年 11 月、1786）（図 8）^{注16)}、「小保町絵図」（年代不詳、天明 6 年以降）（図 9）^{注17)} に上町市場、中の船津に間口の広さが書かれており、明治の復原図を下敷きに地割レベルで復原することができる。さらに、図 8 より小保の御高札場の位置が、宝暦 9 年（1759）2 月の「境図」（図 11）^{注18)} により榎津の御高札場の位置が知られる。

以上より、小保・榎津の近世中期の町並みの範囲が推定され、近世中期復原図が作成される（図 10）。

2-2. 小保・榎津の近世中期の空間構成

近世中期復原図（図 10）によって町並みの範囲を平面的に捉えることが出来た。この図 10 により近世中期における町並みの空間構成上の特徴をおおよそ把握することが出来る。小保の町並みは安定した空間構成を成立させ、榎津の町並みは東側を枳形で画され、南側と西側を江湖、北西側を花宗川、北側を江湖で画された中に、近世中期の町並みは広がり、北側に出来町が張り出していたことになろう。都市形態の特徴として、小保は格差のある間口、小保・榎津ともに自然発生的な道と思われるカーブを描く街路および地尻を持つことで、住吉・若津の近世中期に計画的に町建てされた町と形態が著しく異なることが指摘される。

このような平面上にどのような町並みが展開していたのであろうか。絵図を駆使することにより、その様相を立体的に推察していきたい。なお、絵図史料は小保を描いたものが多いため、小保を中心とした町並みの様相を考察していくこととなる。

小保の町並みが具体的に描かれているものの中で、最も古い絵図

は正保 2 年（1645）の「三瀧郡蒲池与絵図」（図 7）である。一部欠損が見られるものの、入り江や道筋の他、寺社・民家を描く。子細に眺めると浄福寺、八幡神社が描かれ、その前に広場の様な空間が存在し、紫の四角で御高札場が描かれる。また、浄福寺東の札の辻付近に後の絵図には描かれない「御茶屋」の文字が見える。柳川藩が近世前期にここに御茶屋を設置したということは、小保の町が重要であると認識するとともに、小保の町並みの中でも小保八幡神社周辺が町の要であると考えていたと推察される。小保本通りの上町市場、中の船津には妻入りの町家が両側に隙間なく並んでおり、新町も同様に並んでいる。坂本宮からは片側だけとなる。通りが花宗川に突き当たり、そこに渡し場が 3 つ設けられ、その手前に番所が見え、堤が花宗川と小保の町を隔て、それが入り江と渡し場を取り囲む。町並みは草葺きか瓦葺きかは判断できないが、寺社と町家では、寺社の屋根に鬼瓦のようなものをのせており、描かれ方に差がある。町並みを構成する町家は妻入で描かれる。

次に町並みが描かれているのが、宝暦 9 年（1759）2 月の「境図」（図 11）で、町並みの様子は「三瀧郡蒲池与絵図」（正保 2 年）（図 7）とあまり変化はないが、町並みは平入りにて描かれ、図 7 と矛盾する。その他、榎津と小保の藩境の石が描かれ、社寺は法泉寺・天神森・光楽寺が描かれる。また、土塁が入り江と渡し場を取り囲むことがより詳しく窺え、光楽寺の裏まで続いていることが把握される。この藩境の石は『大川市誌』の古老の話によると、「馬継場で藩境の石には馬をつないでいたらしい。」とある^{注19)}。町並みは草葺きか瓦葺きかも判断できないが、『大川市誌』の古老の話によると、「小保町の家々は大正頃までほとんどの家が平屋建てで草葺きであった」という^{注20)}。このことから町並みは、草葺きの町家が連続して形成していたと考えられよう。

天明 6 年（1786）11 月の「小保町絵図」（図 8）からは、上町市場・中の船津の屋敷間口の広さがわかる。

間口の広さの分布は、2 間が 27、2 間半が 29、3 間が 21、3 間半が 10、4 間が 4、4 間半が 4、5 間が 3、5 間半が 2、6 間が 4、6 間半が 1、8 間が 1、9 間が 4、11 間が 1 である。2 ～ 11 と間口の規模が様々で、狭い間口が大半を占めていることが特徴的である。ちなみに年代不詳の「小保町絵図」（図 9）は 9 尺が 3、2 間が 12、2 間半が 7、3 間が 4、4 間が 4、6 間が 1、8 間半が 3、12 間半が 1 である。こちらからも間口規模に隔たりがあることが読み取れる。よっ

図 11 境図（宝暦 9 年、1759）

て、小保の町並みは、間口の分布は2間半のものが最も多く、間口2間半に建築される町家が町並みの大部分を形成していたと考えられる。

以上より、小保の町並みは小型町家がずらりと並ぶ町並みに中・大型町家が所々に現れる格差ある町並みを形成していたようだ。また、間口が2間の敷地が3～4連続していることも特徴としてあげられる。

一方、「筑後川絵図」（文政2年、1819）（図5）は若津の町並みが詳しく描かれ、小保・榎津の近世期の町並みを推察するのに参考になり大変貴重な絵図である。

図5の若津の町家は妻入りと平入りに分けて描かれ、ほとんどが平入り草葺き平屋建てである。それ以外に描かれるものとして妻入り入母屋瓦葺き二階建てのものと平入り切り妻瓦葺き平屋建てのものがある。僅かではあるが榎津の町並みも描かれている。榎津は舟入りと榎津江湖が描かれ、御番屋敷が描かれる。舟入りからの位置関係から北浜町と考えられる。舟入りの入口には二階建て町家が描かれる。若津は榎津の隣町で、同じ藩に属することから、榎津の町並みも草葺平屋建て町家の並ぶ町並みに妻入り入母屋瓦葺き二階建て・平入り切り妻瓦葺き平屋建ての町家が点在する景観を形成していたと推察される。これは小保の町並み景観の考察とも相通じ、図11・図8・図9が実際を表していると考えられようか。

以上、絵図史料を用い、小保・榎津の近世中期の町並みが非常に変化に富み、通りに沿って平入り草葺き町家が連続して町並みを形成する景観に、中・大型町家が所々に現れる格差ある町並みを形成していたというおおよその全体像を提示することができた。

2-3. 小保・榎津の社会構成

藩政時代、小保・榎津はどのような支配体制の中に属していたのだろうか。

小保町は柳川藩蒲池組に属し、別当を置く。別当は代々吉原家が世襲し、嘉永4年より大庄屋も務めるようになる。榎津町は久留米藩平野組に属し、寛文12年までは大庄屋を置き、それ以降は別当を置く。榎津の別当は大庄屋と同じ扱いを受けていた。このような支配体制のもと、それぞれ港町として成立していた。

しかし、小保・榎津に変わる新しい河口港として、住吉（安永4年、1774）・若津（宝暦元年、1751）が計画的に町建てされ、ここで港の機能が移ることとなる。

近世期の社会構成を知る史料として榎津・若津は「御諸印札棒併諸職人付被仰付置者共年月吉上帳」（嘉永7年、1854）^{注21)}、小保・住吉は「蒲池組御小物成盛掛小帳」（安政4年、1857）^{注22)}がある。

榎津は、木挽き15、鍛冶19、桶師9、船大工101、大工41、穀物仲買印札7、荷米印棒12、諸品問屋印札2、斗屋問屋印札1、代物小間物店27、麴印札13、造酒印札6、受酒印札3、薬種丸散店印札3、唐物印札5、藍瓶印札7、畳師4、産仲買印棒6、打綿印棒21、諸紙仲買印棒3、小商印棒3、牛馬直買往来札13とある。

若津は船大工2、穀物仲買印札5、荷米印棒11、代物小間物店13、受酒印札5、唐物印札2、藍瓶印札1、打綿印棒3、牛馬直買往来札19、家大工3、穀物並諸品問屋印札2、薪問屋印札1、竹木問屋印札1、油船印札1、塩鰯の外諸品問屋印札1、茅屋根葺印札1とある。

「御諸印札棒併諸職人付被仰付置者共年月書上帳」は若津が開港

してから103年経た史料である。榎津は若津が開港することによって港の機能が移る。この史料からは榎津の方が繁栄していた様に捉えられる。若津には久留米藩の米蔵があったことが知られ、「御代々御軍制之調」^{注23)}には「享和年間榎津浦船次第に減少」とあり、職業分布も問屋などが多いことから港の機能が若津へ移っていることは確認できる。しかし、榎津が衰退しなかったのはなぜであろうか。このことは榎津の職業構成に注目すると理解できる。榎津の印札の出されている317の中で、木工関係の印札が166と半数を超えている。また、166中101が船大工であることから主に船を製造していたことが知られる。このことから若津に港が移されても、木工産業が展開していたため、榎津の繁栄が継続したと考えられる。

小保は、浜問屋3、海陸問屋1、石炭問屋3、旅人宿2、小店22、造酒屋2、揚酒屋1、油屋7、糶屋2、酢醬油屋2、麦粉小売屋3、菓子屋3とある。住吉は、浜問屋2、石炭問屋1、竹木問屋2、旅人宿1、渡海船宿1、小店10、揚酒屋2、醬油屋1、陸問屋1とある。

小保は港が移ってからも海陸問屋などがあることから、ある程度港の機能が残されたと考えられようか。また、小保の別当の吉原家が住吉の別当を兼ねること、1851年から吉原家が主屋を務めることから、小保も住吉に港が移ったからといって衰退はしなかったようだ。

以上より、小保・榎津は住吉・若津が建設されたにもかかわらず、小保は蒲池組の政治的中心となる大庄屋を務めたこと、榎津は木工産業の存在により、安定した社会と空間を保ったと考えられる。また、榎津は木工に関わる職種が卓越することが注目されたが、小保はこれら木工に関する職種は見られず、一般的な在方町とさしてかわらない職種構成で、柳川藩の宿駅に指定されていたこと、境争いが榎津とたびたび起きたことより^{注24)}、町は隣接するものの、属する藩によって性格を異にしていたようだ。

2-4. まとめ

以上、近世後期から近世中期の町並みの展開を平面的に明らかとし、絵図の分析により立体的な復原考察をし、町並みの実相を明らかとした。また、住吉・若津に港の機能が移ってからも社会構成の考察により、小保・榎津の繁栄の理由を提示することが出来た。

3. 小保・榎津の町並みの起源

史料に初めて小保と思われる文字が出てくるのは、管見の限り永仁4年（1296）の「隈文書」⁷⁾で、「小法丸村は三瀧郡西郷に属し、三瀧荘鎮守玉垂宮の十朔幣析5斗・11月中卯の日祭料米6斗の他5月15日の五月会の際右方相撲人を出し9月19日の九月会では津村と7番祭頭を勤めそのための料田2反があった。」とある。「筑後志」⁸⁾に小保を「ゴボウ」と訓じていることより小法丸は小保であると考えられる。また、「御船文書」⁹⁾（貞和3年、1347）には、「祭料米六斗 十二月朔幣析米5斗 九月会 祭頭 相模 廻廟 間 但し上下ノ小法」とあり、永仁4年より若干負担が増大している。上下の小法とあるように小法丸は上小法・下小法に分かれていたのであろう。「立花文書」¹⁰⁾（文禄4年、1595）にも「小保津村」と見える。近世に港町として成立していること、筑後川河口に面していることから中世にも津（港）の機能を有していたと考えられ、そのため小保に津を付けていると思われる。

また、小保の地名の由来は二説ある。一つは「旧柳河藩内三瀧郡

地理歴史考」¹¹⁾の「津村の地先に又一つの瘤の如き島頭はれたれば之をコブと呼びしならん」と書かれるコブに求められ、一つは、「大川の昔と今」¹²⁾の「奈良時代律令制下の五保の制にある」という。

以上、町並みの起源は13世紀後期まで遡ることができようか。

一方、榎津の文献史料の初見は、元龜元年（1570）の「蒲池文書」、「田尻文書」¹³⁾である。その後の中世の文書にも榎津の名は見え、「酒見文書」¹⁴⁾（天正9年、1581）では「今度以手切出頭、忠儀定無比類候、仍為其賞、其方居屋敷、蒲池民部少輔跡南分、榎津六町分、同庄分ニケ所、同人跡永藤四町分、（後略）」とあり、この頃には町が成立していたと考えられる。「薦野家譜」¹⁵⁾（天正12年）には「戸次遺言・高橋紹運らは上妻郡坂東寺に軍制をまとめ、榎津・酒見城島辺に放火した」とある。また「天正13年にも榎津を攻める」とある。『北肥戦誌』¹⁶⁾（天正12年）によると、「榎木津の要害に中野式部少輔清明」「戸次入道遺言・高橋紹運が榎津の在家数百軒を総て焼き払う」とある。「立花文書」¹⁷⁾（文禄4年、1595）にも榎津の名が見える。

また、榎津の地名の由来は三説ある。一つは『太宰管内志 中』¹⁷⁾の「名義は榎に由有て負せたるべし」と書かれる樹木名のエノキに求められ、一つは『大川市誌』の「神功皇后が三韓を御遠征になり、御帰朝の際お船を筑紫の葦原の津にお着けになり津を得たといわれたのが得の津となり、さらに転訛して榎津になったという。」¹⁸⁾と書かれる津を得たに求められ、一つは「願蓮寺文書」¹⁹⁾の「当寺開祖善明榎津久米之介と号す。源義明足利十二代將軍之幕下榎津遠江之舎弟也。（中略）天文五丙申、氏を以て地に命ず」と書かれる天文5年創建の願蓮寺開基榎津久米之助に求められると言う。

小保・榎津ともにこれら以外に町並みの成立起源に結びつく史料は存在しない。これら諸説を念頭にいれつつ、前節で得られた近世前期を見通しえる近世中期復原図（図10）に投影し、中世に遡る小保・榎津の町並みの成立起源について考察を巡らせたい。図10を眺めるといくつかの顕著な特徴を指摘できる。

第一は緩やかに曲がる道路に沿って間口・奥行きの不均質な地割が並ぶ町筋が中心部に位置する本町・庄分町・城町南側・長町・水入町・向町南側・上町市場・中の船津・新町と、直線の道路に沿って間口・奥行きの均質な地割が並ぶ近世起源の町筋、津村町・藪町・向町北側・横町・浦町・城町北側とが明らかに性格を異にする空間構成を呈する点である。

第二は空間構成上の中心が明確に存在することで、そこから小保・榎津の主要な町筋が放射状に広がっている。柳川藩領と久留米藩領の境に位置し、久留米藩の高札と僅かに離れて柳川藩の高札がおかれ、藩政初期には柳川藩の御茶屋が存在し、都市構造的にも都心として長らく機能した。また藩境の石がおかれ、その中心としての重要度も窺える。

第三はこの都心から主要な町筋が川に向かって延びる点で、近世中期に成立した住吉や若津が川と並行に町筋を設定する点と対照的である。

第一・二の特質は中世起源の都市に通有し、第三は中世起源の港町に通有する空間特質であり、これらを手掛かりとして町並みの成立起源について考察を巡らすことが可能になる。

もう一つの手掛かりは寺院のその場での成立年代である。復原図に記した成立年代を見ると、中世に成立起源が遡るものは浄福寺の

他、天文3年（1534）の光福寺、天文5年の願蓮寺、天文10年の覚了寺、天正5年（1577）の正覚院があり、法泉寺は小保の旧寺地に天正期（1573～1581）の成立である²⁰⁾。城町に置かれたとされる榎津城²¹⁾は天正12年には存在したことが知られる²²⁾。

さらに町並みの広がる範囲における現状の微地形も参考になる。これを考察するため、都市計画図の水準点をもとに、高さ25cmおきに等高線を落とし、それを近世中期復原図（図10）に再度落とした。これを中世町場が展開していたと思われる領域に注目して見ていくと、特徴ある四つの地形に明瞭に分けられる。一つ目はこの周辺で最も高い元法泉寺の4.75mとなっている場所（この小高い場所は上町市場・中の船津・本町・庄分町にまたがる）、二つ目は水入町の天満神社付近で4.75mと高くなっている場所、三つ目はそれに挟まれた谷で4.25mのラインが八幡神社から長町・出来町にかけて緩やかに広がっている場所、四つ目は八幡神社西側・新町周辺で急勾配になっている場所である。注目すべき点は八幡神社が水運の良い水路際、水はけの良いと考える事ができる二つの丘に挟まれた中心に立地していることである。これらの中心は空間構成上の中心である札の辻とその南側に位置する小保八幡神社一帯に求められよう。この小保八幡神社の創建は元久期（1204～1206）とされ²³⁾、地名の初見とおおよそ一致を見る。

以上の検討結果を勘案し、まず、榎津の中世の姿を遡及的に復原することを試みたい。町境の街路と街路が交わっている場所の角にあたる地割は、角の地割を持つ町の方が先に成立したと考えられることから、地割がどちらの町に属しているのかを見る。また、小保八幡神社の起源が最も古いため、その周辺から町場が形成されたと考える。そうすると、水入町の後に長町が成立し、長町の後に出来町が成立し、出来町の後に藪町が成立し、本町、庄分町の後に城町が成立し、城町、長町の後に向町の南側が成立し、出来町の後に向町の北側が成立し、横町の後に浦町、船倉が成立したと考えられよう。さらに、前述の「酒見文書」²⁴⁾（天正9年）の「榎津六町分、同庄分ニケ所」の文言にあたる場所を比定してみると、不均質な地割が並ぶ町筋の榎津城跡のブロックである本町・城町南側・長町・向町南側の面積が約6町（5994.6㎡）で、これが榎津6町分に相当すると考えられ、庄分は庄分町に当たると考えられ都市形態と古文書の記述が一致する。

よって、榎津の成立過程は定かではないが、寺院の成立年代や文献を鑑みると天文期（1532～1555）に起源が求められ、寺院を核とした多核複合的な空間を形成していたと推察される。天正期には榎津城が建設され、徐々に本町・城町南側・長町・向町南側・庄分町を形成したのであろう。水入町は不明であるが、地形が高く、中心に近いことから、これら諸町と同時期かやや遅れて成立したと予想される。これらが形成された後、北側へ拡大し、花宗川に沿って城町北側・横町・浦町・船倉・出来町が形成され、近世の町並みが徐々に形成されたと考えられる。

このような榎津が形成される以前に小保の町並みは成立していたと考えられる。中近世移行期の都市史の成果に従えば、「津・泊・宿などの水陸交通の要所には、船着場を伴った市町である港町が成立し、商品を荷揚げする船着場と商品を納める蔵、またはこれら进行管理する港湾管理者の館を頭に頂き、そこから内陸へ向かう街道で市が開かれ、その両側に商人宿が建ち並び町空間が成立した」²⁵⁾

と考えられていることから、この水際線に垂直に伸びる道として、花宗川にある船着場と起源の最も古い小保八幡神社とを結ぶ小保本通りがこれに該当すると考えられよう。小保八幡神社が位置する字名が上町市場で、船着場の字名が中の船津とあることは、小保八幡神社を核として成立した門前に、市が開かれたことを想起させ、市は商品を荷揚げした船着場に向かう一本の道筋上で開かれ、道の両側には商人を宿泊させた町家が軒を連ね町並みを形成していったという仮説が提示できる。小保八幡神社の前面に広場のような空間が用意されていること、小保の町筋がこの道筋を中心として求心性の強い空間的なまとまりを有すること、天明6年「小保町絵図」(図8)、年代不詳「小保町絵図」(図9)には9尺から2間の狭小な間口の地割の見えること、明治期復原図に表れる小保と榎津の境界線が小保を取り囲むように緩やかに湾曲し、境図(宝暦9年)(図11)には町別当を務めた吉原家と光楽寺の背面に小保を取り巻く土塁が見られることが傍証となろう。

結論

以上、中近世移行期の在方町の空間変容の推定できる福岡県大川市小保・榎津について考察を行い、以下の点を指摘した。

第一に小保・榎津の都市形態において近世起源の都市形態と中世起源の都市形態があり、これらの形態が大きく異なることを指摘した。

第二に小保・榎津の町並みは近世中期には平入草葺き町家の並ぶ町並みに所々妻入草葺き町家、妻入瓦葺き土蔵造り町家が点在しながら町並み景観を構成し、近世後期に町並みが展開を見せ、周辺部に均質な町並みを形成したことを指摘した。また、小保と榎津は隣接するものの属する藩によって社会構成を異にすることを指摘した。

第三に小保・榎津の町並みは小保八幡神社の成立を契機として展開し、小保八幡神社門前に開かれた市と船着場を起源とし、中世前期に成立したという仮説を提示した。それらから派生するかたちで光福寺・願蓮寺・覚了寺の創立を契機とし、町並みの様相を呈していったものと推察し、その展開は天正期に建設された榎津城建設にともない、花宗川沿いと久留米に向かう街道筋、柳川に向かう街道筋に町並みが拡大したことを遡及的に考察し、都市の成立過程の仮説を提示した。

謝辞

本稿は修士論文をもとに加筆・修正している。指導していただいた故宮本雅明先生に哀悼の意と謝意を表したい。

注

- 注1) 多くの先行研究があり代表例をあげると中野茂夫・藤川昌樹・河東義之「近代における在郷町の都市・建築空間と産業化の影響－茨城県桜川市真壁町を事例として－」日本建築学会計画系論文集621号,2007.11、秋元 一秀・竹下 輝和「町屋敷地の奥行方向の変容過程からみた内子町八日市及び六日市の空間構成の特徴」日本建築学会計画系論文集527号,2000.1、黒野 弘靖・菊地 成朋「街路と屋敷の対応関係からみた在郷町の空間特性：小矢部市「津沢」のケーススタディ」日本建築学会計画系論文集509号,1998.7等がある。
- 注2) 参考文献1)の他、三浦要一「土佐の在郷町・奈半利の都市空間に関する研究」日本建築学会中国支部研究報告集26,2003にも中近世移行期の考察が窺える。
- 注3)「明治の地籍図」(大川市法務局蔵)
- 注4)「筑後国三潯郡榎津町土木取調絵図」(明治11年)(柳川古文書館蔵)

- 注5)「筑後国三潯郡榎津町之図」(明治11年以降明治21年以内)(柳川古文書館蔵)
- 注6)「筑後国三潯郡小保町土木取調図」(明治11年)(柳川古文書館蔵)
- 注7)「明治の地籍図」(大川市法務局蔵)
- 注8)「筑後川絵図」(文政2年)(久留米市立図書館蔵)
- 注9)「住吉宮旧記写」『吉原文書』(柳川古文書館蔵)
- 注10) 参考文献2)
- 注11) 参考文献3) 所収
- 注12) 参考文献4) 所収
- 注13) 参考文献6) 所収
- 注14) 中世起源と思われる町並みに引き続いていることから奥行きが若津と異なる寸法になったと考えられ、それに伴い間口も若干広いと考えられる。
- 注15)「三潯郡蒲池与絵図」(正保2年)(柳川古文書館蔵)
- 注16)「小保町絵図」(天明6年)『吉原文書』(柳川古文書館蔵)
- 注17)「小保町絵図」(年代不詳、天明6年以降)『吉原文書』(柳川古文書館蔵)
- 注18)「境図」(宝暦9年)『吉原文書』(柳川古文書館蔵)
- 注19) 参考文献2)
- 注20) 参考文献2)
- 注21)「御諸印札棒併諸職人付被仰付置者共年月吉上帳」(嘉永7年)『田中文書』(柳川古文書館蔵)
- 注22)「蒲池組御小物成盛掛小帳」(安政四年)『吉原文書』(柳川古文書館蔵)
- 注23)「御代々御軍制之調」(享和年間)『田中文書』(柳川古文書館蔵)
- 注24) 参考文献2)
- 注25) 参考文献11)
- 注26) 参考文献2)
- 注27)「願蓮寺文書」(願蓮寺蔵)
- 注28)「大川市誌」には榎津城の存在地の根拠として城町の名が有ることからここにあるとされる。今回の地籍図の作成及び分析より、本町、長町、向町、城町の町屋敷の地尻の関係は互いの地尻は直接に接し合わずその間には寺院、墓、田、畑等の空隙空間があることを指摘した。この形態的特徴及び城町という地名よりここに榎津城があった可能性は高い。
- 注29) 参考文献16)
- 注30) 前掲「大川市誌」には「蒲池名所旧跡帳」に「延長年中(923～930)、筑前国大宰府天満宮を勧請し氏神にしていたところ、元久年中(1204～1206)京都の人、秦段蔵(「神社明細帳」には、高倉院の家臣秦弾政行とある) というものが当地へ来たり、山城国石清水八幡宮を勧請し、九月十五日入津せしをもって同日を祭日と定む。古来天神の敷地なればとてその節四か所に天満宮を安置し、いまに社あり。外に祇園社もあり。」とあり、延長年中に天満宮、元久年中に八幡神社が創建されたことがわかる。
- 注31) 参考文献14)
- 注32) 参考文献1)

参考文献

- 宮本雅明：都市空間の近世史研究，中央公論美術出版，2005
- 大川市誌編集委員会編：大川市誌，大川市，1977年
- 久留米市史編さん委員会編集：久留米市史第9巻資料編近世，久留米市，1993年
- 福岡県：福岡県史資料第3輯，福岡県，1934年
- 石原為平著：石原家記，1763年（1973年名著復刻版より復刻）
- 久留米市史編さん委員会編集：久留米市史第8巻資料編近世，久留米市，1993年
- 竹内理三編：鎌倉遺文 古文書編 第25巻，19238，東京堂出版，1983
- 杉山正伸・小川正格編：筑後志，本荘知新堂，1907，p 353
- 瀬野 精一郎編：南北朝遺文 九州編 第2巻，2372，東京堂出版，1981
- 福岡県：福岡県史資料第4輯，福岡県，p153，1933年
- 渡辺村男編著：柳川藩叢書 第一集（復刻版），青潮社，1984
- おおかわ文庫編集委員会：大川の昔と今，大川市，1990
- 東京大学史料編纂所編：大日本史料第10編之4，東京大学出版会，p342，1968
- 東京大学史料編纂所編：大日本史料第11編之2，東京大学出版会，p809，1982
- 九州文化総合研究所太宰府調査文献班編：大宰府太宰府天満宮博多史料続中世編6，九州文化総合研究所，p161，1960
- 馬渡俊継原著・高野和人編纂：北肥戦誌，青潮社，p706，1995
- 伊藤常足編録：太宰管内志 中，歴史図書社，p192，1969
- 古賀正美解説：寛文十年久留米藩寺院開基，久留米郷土研究会，1982

(2012年3月8日原稿受理，2012年7月27日採用決定)